

# ピアノ奏法におけるペダルの技法

—基本的ペダル技法の解釈について—

Pedalling in Piano Performance

—Basic Interpretation for Pedalling—

根 木 真 理 子

Mariko NEKI

(昭和52年10月11日受理)

## Abstract

This study was aimed to give theoretical and practical interpretation for pedalling technique. Pedalling in piano performance is one of the most fine and delicate technique to express musicallity; especially *legato*, phrase and rhythm. In other words, pedalling is a way of emotional expression, so it is not indicated on a score in general. As a result, not many things are discussed in concerning with the pedalling technique up to now. In many cases, pedalling is left for player's own feeling and interpretation.

In this report, basical interpretation for right pedal (*legato* pedal, accent pedal, *tremolo* pedal and half pedal), left pedal (soft pedal), center pedal (prolongement pedal) and other pedalling technique in each practical problems such as passing note, scale, rest, *staccato*, organ point, *allegro* and harmonic sequene are discussed by using typical examples through my experiences as a piano player and as a teacher in piano class.

## 序

近年、我が国におけるピアノ普及率は急速に増大し、それに伴いピアノ教育における理論的且実践的な研究が追求されているが、筆者はピアノ奏法に於てペダルがどのように使われ、又どのように使うべきかについて考察を進めてみたい。

ピアノ奏法に於ては単なる指の熟練による機械的な譜面の演奏のみならず、その中に作曲者の意図した思想や、奏者の情緒をもち込むことが必要である。そのためにはここで述べるペダルが重要な役割を持っている。ペダルとは音楽性、特にレガート（滑らかに接続して表わすこと）、フレーズ（音節）、リズム（音楽的調子）等を表現するために用いられるが、多くの場合これらは譜面に記されていない。このような音の表現をどのようにして行なうか、筆者の経験から感じた演奏上、指導上の方法及び問題点について述べてみたい。

## I ペダル使用とその目的

音符の価値は音の長さの真の姿を示すものでなく、特にベートーヴェン以来いわばただ暗示的なものにすぎなくなり、譜面のもつ問題を解決するためには音楽的な感覚、豊富な知識が必要である。しかしペダルのための譜号表示はほとんど行なわれず、現在に於てもこの技術分野は全くと言っていい程演奏家の自由解釈に任されていると言っても過言ではない。

ペダルを踏むと同時にすべてのダンパーはピアノの弦から離れ、弦が自由に震動するために種々の現象が現れる。ペダルなしに弾かれた音は比較的短く単純であるが、ペダルを使うと音の性質が変化し一種の魅惑的な音となる。

一般に、ペダルの使用に際しては踏み方（足の置き方）が正確に守られていない。まず足の位置は踵を床の上につけ、足の指のつけ根下のふくらみがペダル先端の丸くなった部分にあたるようにして、いつ時でも踏める状態にしておく必要がある。それだけでなく踏むという動作の中には音楽に対する感覚、楽曲についての解釈、表現の技術等音楽に対する内面的なものが表われるため非常に難しく、せめて踏む動作位は軽くスムーズにしたいものである。テクニックの未熟さをごまかしたり、間違いを隠すためにあいまいに踏んだり、和声の輪廓とは関係なしに機械的に踏んだりしないことを心掛け、指や手による技術をしっかり身につけてからペダルの技法を学びたいものである。

ペダルを使う目的に従って区別するならば、大きく次の2つに分けられる。

### A) レガート・ペダル

音を長びかせ、音と音との重なりをすることにより音色を変化させたりハーモニーを作るために用いる。

### B) アクセント・ペダル

音量を強め、他の音との区別を明確にすることによりリズムを持たせる。

これらは実際には各自独立した目的に用いられることは希であり、多くの場合は2つないし3つの目的が同時に遂行されるのが普通である。

その他に、ソフト・ペダル（左のペダル）とプロロンゲメント・ペダル（中央のペダル）があり、これらの使用目的と実際の技法について詳述したい。

## II、右のペダル

ペダル使用目的でレガート・ペダル、アクセント・ペダルと大きく2つに分けたが、これに1/2ペダル、トレモロ・ペダルを加えて考えてみたい。

### 1, レガート・ペダル

このペダルはライマー・ギーゼキングによれば“切分的ペダル”と呼ばれており、まずペダル技法を習得するに当って最初に学ぶべきペダルと言えよう。

ペダルはハイドン後期から出来たもので、ベートーヴェンの作品から主にペダルを考えて作曲されている。例えば、バッハのフーガ等を弾く場合はほとんどペダルを用いないし、その頃の曲はペダルがなくても良い音の範囲内で構成されており、時折音をつなぐためにわずかにレ

ガー・ペダルを用いるだけである。

レガート・ペダルの習得は、ピアノ音楽にとっては少なくともすべての音階と三和音分散のあらゆる組合せの把握ぐらゐの重要性と価値があり、全ピアノ音楽の中で高度の地位を占める。そのために踏む、離すタイミングをしっかりと身につける必要が生じる。

レガート・ペダルは指で鍵盤を押えると同時に踏むのではなく、押えてから踏むペダルである。指で鍵盤を押えると同時にペダルを踏むと、前の音の響きが残っていたり音が完全に切れてなかったりして音が濁る。まず音階で試してみるのが一番分かり易い。

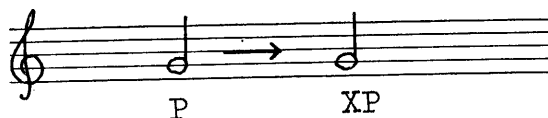
Cはその前に音が無いため同時に踏んでも押えてから踏んでも変わりはないが、C→Dへと移行する場合、指を押えると同時にペダルを踏むと濁る。



ペダルに関する記号は著者、出版社によって異なるが、本文中においては踏む<P>、離す<X>で示す。

実際、レガート・ペダルの場合記譜上と演奏上とでは多少のズレがあることを注意しておきたい。

レガート・ペダルでは手の動きだけでは得られないレガートが得られるが、より充分なものにするためにはペダル



を使用する前に手の動き、指の使い方のみでレガートが弾けるよう心掛けねばならない。ペダルは不足を補うためではなく、音楽をより良くするために用いるべきである。

シューマン ユーゲント・アルバム



音楽上一番大切なことはハーモニーを崩さないことであり、ペダルの踏み方に多少の伸び縮みがあっても手の方が十二分な状態になっていれば、全体としての効果には余り影響がないといえる。

主体的な音符だけが存在するレガート・ペダルは上の例で示したように簡単明白である。

## 2, アクセント・ペダル

ペダルは常に音を出してから踏むものとは限らない。指が鍵盤を打つと同時に踏まねばならぬ場合もある。このペダルはリズム・ペダル、同時ペダルと呼ばれることもある。

アクセント・ペダルで注意せねばならない点は、前の音の響きが少しでも残ってはなら

ないことである。言い換えればその音を出す時まで前のペダルを踏んでいたり、指で音を伸ばしていたりしてはならない。

アクセント・ペダル的一种として、曲の最初の音とか長い休止符のあとなどで音を出す前にペダルを踏んでおく奏法も含まれる。

ブラームス ラプソディー Op. 79

Musical score for Brahms' Rhapsody Op. 79. The score is in G major, 2/4 time. It shows the piano accompaniment with several measures marked with 'P' (pedal) under the bass line. The melody in the right hand features a series of eighth notes and quarter notes, with some measures marked with 'f' (forte) and '5 (55)' (fingerings).

アクセント・ペダルは、前の音が完全に消えてしまうまでは次の音を弾くことが出来ないため演奏の際には人工的な間隙を作る。

ベートーヴェン ソナタ Op. 57

Musical score for Beethoven's Sonata Op. 57. The score is in D major, 2/4 time. It shows the piano accompaniment with several measures marked with 'P' (pedal) under the bass line. The melody in the right hand features a series of eighth notes and quarter notes, with some measures marked with 'p' (piano) and 'R.' (ritardando).

ここでアクセントペダルが特に有効な例をあげてみる。

- 1) オクターブ又は和音がペダルなしでは十分に満たされない場合

ベートーヴェン ソナタ Op. 81a

Musical score for Beethoven's Sonata Op. 81a. The score is in D major, 2/4 time. It shows the piano accompaniment with several measures marked with 'P' (pedal) under the bass line. The melody in the right hand features a series of eighth notes and quarter notes, with some measures marked with 'Allegro', 'ten.' (tension), 'sf' (sforzando), 'p' (piano), 'cresc.' (crescendo), and 'sfp' (sforzando/piano).

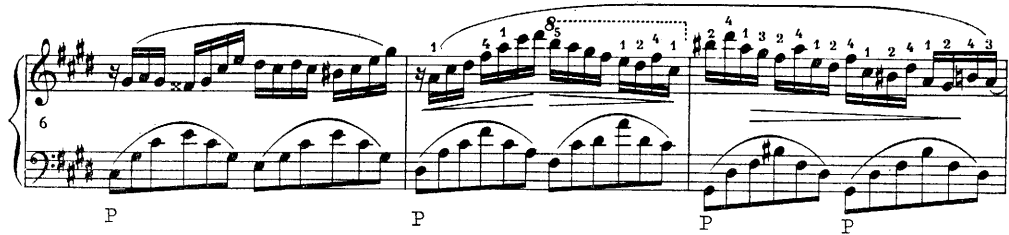
- 2) 短いピチカート風の音の場合

リスト ソナタ h moll

Musical score for Liszt's Sonata h moll. The score is in C major, 4/4 time. It shows the piano accompaniment with several measures marked with 'P' (pedal) under the bass line. The melody in the right hand features a series of quarter notes and half notes, with some measures marked with 'Lento assai.' and 'p sotto voce'.

3) 和声の土台としてバス音を必ず残したい場合

ショパン 幻想即興曲



特にショパンの作品では一つの和声に一つのペダルと言われているが、その場合絶対に欠かせないのがバス音であるということを忘れてはならない。ショパンのノクターン等メロディーに音階や半音の動きが多いからといってメロディーによって神経質に踏み換えるのではなく、それを支配しているバスの響きや動きをよく聞き分けることが必要である。すなわちペダルは経過音と和声の響きのバランスが問題なのである。又メロディーの流れの速度とも大いに関係があり、和声やメロディーの移り変わりに踏み換えることばかりではない。経過音については後で取り上げることにしよう。

4) ワルツ、ポロネーズ等リズムを誇張する場合

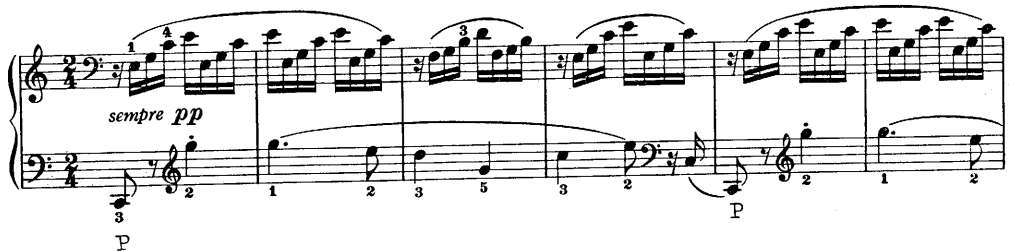
ショパン 小犬のワルツ



3, 1/2ペダル (ハーフ・ペダル)

1/2ペダルとは全部踏み押えて半分離すことであり、これは互いに妨げあう和音、もしくは経過音があるために不必要な不協和音を避けるために支えとなる和音を弱める必要がある場合、音階でペダルが必要な場合に用いる。又淡い和声的な雰囲気を作り出すには絶好のものとして使用されている。

ベートーヴェン ソナタ Op. 53



スタッカートに1/2ペダルを使用すれば、ペダルを使用しないで演奏された時に生じる誇張さ

れた短さと乾いた不愉快な音を少なくする効果がある。

1/2ペダルと同様に1/4ペダル, 3/4ペダルとあるが, その都度必要なペダルを選択出来る耳を養うことが必要である。

#### 4, トレモロ・ペダル

これはペダルの上で足を極めて素速く連続して動かすペダルである。この場合ペダルが上下する距離は余り問題にならず, いかにも速く動かすかという点にある。

使用のねらいはペダルを続けて踏み押えることも完全に放すことも不適当な場合に少しばかり支えとなるハーモニーを作り出すことにある。通常半音階, 音階などに使用すると一層効果的である。

#### メンデルスゾーン ロンドカプリチオーソ

The image shows a musical score for Mendelssohn's Rondo Capriccioso. It features a grand staff with treble and bass clefs. The music is in 3/4 time and G major. The score includes several measures with piano (p) and fortissimo (pp) markings. Pedal markings (P) are placed below the bass staff at various points. The final measure of the excerpt is marked with 'dolce poco ritard.' and has a 'P' marking below it. Fingerings are indicated with numbers 1-4 above the notes.

### Ⅲ, 左のペダル (ソフト・ペダル)

弱音ペダルとも呼ばれ, 音を弱くすることと音色の変化にあり, 響きを減じ又柔らかくするように作用する。このペダルについての規則は無いが, 単に音を弱くすることのみに使われている傾向にある。弱い音を出すにはまず指のみで弾くことが先決で, その上でソフト・ペダルを使用しなければこのペダルの特色も出てこない。

主題又は主旋律に *p* (弱く) *pp* (非常に弱く) が要求されている場合には, ソフト・ペダルは使用すべきでない。ショパンのノクターン, メンデルスゾーンのいくつかの無言歌等大部分の主題は極めて明瞭な歯切れの良さが必要であり, 冒頭に出てきた場合には使用せず, その主題が二度三度と同曲中に現れた場合には使用することも可能である。又エコー的表現や薄気味悪い神秘的な情景の描写等は, しばしばソフト・ペダルによって助けられる。ラベルの“絞首台”には作曲者自ら “*Sourdine durant toute la piece*” (“全曲中にソフト・ペダルを使用せよ”) と書いている。

ソフト・ペダルは演奏家によって自由自在に使用されているが, 希に譜面上に記されている。*una corde* (又は *due corde*) と記されている箇所では踏み, *tre corde* (又は *tutte corde*) で放す。

### Ⅳ, 中央のペダル (プロロングメント・ペダル)

保音ペダルと呼ばれ, 左右のペダルの中央に位置するものですべての楽器に付属しているとは限らない。これは踏んだ時の音だけが残るもので, その時弾いた音の一つ又は一組の和音だ

けを保つ効果をもち、その後には弾いた音には作用しない。持続音（オルゲル・プント）を弾くのに便利。

V, ペダル使用上の諸問題について

1, 経過音

我々が最も頭を悩ます問題であり、ピアノ曲で経過音が出てこないフレーズはまず希である。しかもベートーヴェン以後の作品では、ほとんどペダルを使用すると言っても過言ではない。

ピアノの最高音域における経過音は多くの場合問題にならないが、中音部に向かうに従って経過音の存在がはっきり感じられるようになる。経過音が旋律の中に現れると、ペダルを放す時期についてそれぞれの判断が必要である。経過音を含む主題や伴奏部が共に低音部にある場合、経過音はほとんど全音階的であるがフレーズ全体が非常に低い音域にあるのでペダルは使用しない。主に全音階的な性格の華やかな低音部は、高音部が持続された旋律的性格ならばペダルの助けが必要であるが、正しい判断によって使い過ぎにならぬよう気をつけたい。

連続して経過音が出てくる対位的な性格の音楽、特にフーガの場合ペダルを使用することはごく希である。

フランク プレリユード コラール フーガ

又、次の場合のようにほとんど和声に影響しない経過音がある時にはまず考える必要がない。

メンデルスゾーン 無言歌

我々はある程度まで経過音に関係なく音量を強くすることや、オーケストラ的効果を要求される作品等に使用することはしばしばある。又ドビッシェやラベル等和音の清澄さよりもペダルから出される雰囲気を求める場合、経過音や和音がまざり合うことがペダルの使用を避ける目安にはならない。ペダルを使用すべきかどうかについては、その音楽が属する時代や楽派に

よって適当であるかを考えてみる必要があるが、各論に関しては次回以降に考察してゆくこととする。

## 2, 音階

あらゆる全音階的又は半音階的音階に出てくる音符の大半は経過音である。何か特殊でダイナミックな、或は雰囲気的な効果を演奏したい場合にはあらゆる形式の音階にペダルを用いるが、伴奏も予備和音もない片手の音階、重音の下降音階、低音におけるオクターブの音階等の場合はなるべく用いない方が望ましい。音階は常に鮮明さを求めていなければならない。

### ベートーヴェン ソナタ Op. 109

*cresc.* (だんだん強く) や *f* (強く) *ff* (非常に強く) を伴う音階はペダルを使用するが、踏む時期、長さは使用しすぎないように気をつける。又ベートーヴェン作曲ピアノ協奏曲ハ短調の冒頭の両手音階においては使用を避けるかトレモロ・ペダルを使用するとよい。

ショパン以降の作品には同一和声の和音が先行し、そして *f* (強く) *ff* (非常に強く) で弾かれる上昇音階にはペダルの効果を発揮するものとして使用される。

### ショパン ポロネーズ

反行音階やグリッサンド等はすべて音階と同じ条件を持っているものと考え、これらは必要な速さで弾きこなすことができるという前提の下に成り立つ。又低音部の旋律上の音階はその低音部の要求によって使用する。

一般的に音階に関して曲の速さ、演奏室やホールの大きさが重大な関係にあり、その場の状況を判断しながら使用し、曇りを作り出さないよう注意せねばならない。

## 3, 休止符

短い間の無音を意味する休止符が高音部と低音部に同時に存在する場合には、音をつなぐためのペダルを使用することはできないように思われがちである。一方ではペダルは単音や和音



を明確に持続するものでなく正しい和声雰囲気でそれらの空間を満たす事であり、和声の交替が起きペダルを放す必要がある場合以外には休止符が現れたことでペダルを離す必要はない。高音部もしくは低音部のみの休止符は、別な片方によって弾かれるフレーズの構成による。

休止符によって切り離された同一和声の和音や和音移行は、普通全曲もしくは曲の段落等いずれかの結末小節に見られるが、終結和音の前に主和音以外の和声や経過音を加わった主和音が先行すれば、終結和音の前やそれらの間にある休止符でペダルを放し、改めて終結和音に対してそれぞれ踏み押える。

シューマン 謝肉祭

経過音によって妨げられない主和音の和声ならば、和声を継続させる意味でもペダルは押え続けてもよい。曲の終末でなく途中での休止符によってフレーズを中断する場合には、和声の要求に対するフレーズを正確に読み取る必要がある。

自分の判断とは違ったペダルの使用が譜面上に指示されている場合には自分の判断を信じて使用するべきであり、ペダルはある程度まで各自の趣味の問題ともいえる。

4, スタッカート

スタッカートとペダルは極めて対立的なものであるから、それらは同時に使用すべきでないという意見を多く聞く。しかしスタッカートで弾くように書かれた音楽にも、レガートに弾くように書かれたものと同じ位ペダルによって補われる背景や和声的雰囲気の持続を必要とする場合は多い。ベートーヴェンのソナタ Op. 14 第二楽章は演奏してみると軽くペダルを使用した方がより一層の効果をあげることができる。

又シューマンのノヴェレッテン 1 番、交響的練習曲等連続和音もしくは休止符が点在する和音はペダルを使ってスタッカートでなく弾かれることもある。

ベートーヴェン ソナタ Op. 14-1

## シューマン 交響的練習曲

## 5, 低続音

低続音は普通単音もしくはオクターブの形を取るが、低続和音もしばしば見受けられる。一般的には、和声の移り変わりでもかまわず踏み続けても良いと言われている。この場合にはまざりあった和声が持続される事になり余り好ましくなく、これを補い明瞭さを得ようとしてペダルを放したり踏み換えたりすると逆にその場を支配する根底低音の響きが失われてしまう。

## ドビッシェ 沈める寺

現在使用されているピアノの構造に於ては、はっきりした解決策は見つけ出されていないが低続音は我々が演奏する曲中にしばしば現れてくる。その場合1) 素早いペダルの踏み換え、2) 低続音を音を鳴らさずにもう一度押える、3) 曲の性格によって踏み続ける、などの方法が用いられている。

## 6, アルペジオ

アルペジオにおいては非常に踏み易い場合と踏みにくい場合とがある。  
ショパンの練習曲 Op. 25-12のような場合は和声は和声が変わるごとに踏み換える。

ショパン 練習曲 Op. 25-12

アルペジオが伴奏形式として現れた場合も同様と考えてよいが、常にレガートペダルを用い耳で和声を確認しながら使用せねばならない。モーツァルトなど楽派によってはすべてのフレーズを一種の和声の雲に被い隠すことになり、音楽の演出を特色づけるべき透明な明瞭さを手に入れることが不可能になることもあるので注意せねばならない。

シューマンやショパンによく出てくる違った型のアルペジオを取りあげてみる。

シューマン 交響的練習曲

原譜は右記のようであるが、この曲の場合次の二通りの方法でペダルの活用が考えられる。

1) ソプラノに少し間が入り、右手の嬰ハ(cis)でペダルを踏む時その前の嬰ヘ(fis)を指で押えているため右手の三和音はすべての音が響く。バス音嬰へは最初の右手の嬰へと同時に弾く。

2) 嬰へにペダルをつけて弾く。バス音はソプラノと同時に演奏する。

1), 2) とどちらを弾くかは各自の好みである。又別の方法もあると思うが濁らずに和声を生かしてペダルを使用することが大切である。

1)

2)

Musical score for piano, showing a sequence of chords and notes with pedaling instructions (P) and dynamic markings (p). The score is in G major (one sharp) and common time (C). The right hand plays chords and moving lines, while the left hand plays chords. Pedaling instructions (P) are placed below the bass staff at various points, indicating when to press the sustain pedal. Dynamic markings (p) are placed above the notes in the right hand.

## 7, 反復和音

シューベルト さすらい人幻想曲

Musical score for piano, showing a sequence of chords and notes with pedaling instructions (P) and dynamic markings (ff). The score is in G major (one sharp) and common time (C). The right hand plays chords and moving lines, while the left hand plays chords. Pedaling instructions (P) are placed below the bass staff at various points, indicating when to press the sustain pedal. Dynamic markings (ff) are placed above the notes in the right hand.

アルペジオの場合と同様にペダルと共に演奏せねばならない。しかし演奏効果を考えながら踏む長さを調整せねばならない。但しペダルを全く使用しないということは考えられない。

## あとがき

以上述べてきたように、ペダル技法はピアノ演奏上において極めて基本的にして且重要な技術であり、今回はペダル技法に於ける全般的な問題点を指摘すると共に解釈を加えるに留めた。

ペダル技法はいかにして音楽作り、個性を作り出すものとして多くの場合使用されておりこの限りにおいてはその使用法は作曲者の持つイメージや学派によって個々に使い分けるべきである。これらの点については今後各論として考え方を述べたい。

## 参考資料

- A, H, リンド著, 北野健児訳 ピアノ・ペダルの芸術 音楽之友社 昭和51年
  - L, クロイツァー著, クロイツァー豊子\村上紀子共訳  
芸術としてのピアノ演奏 音楽之友社 昭和44年
  - K, U, シューナーベル著, 青木和子訳 ペダルの現代技法 音楽之友社 昭和51年
  - 井口基成 著上達のためのピアノ奏法の段階 音楽之友社 昭和51年
  - G, ネイガウス著, 園部四郎訳 ピアノ演奏芸術について 音楽之友社 昭和51年
- なお原典楽譜については下記出版社のものを記載  
音楽之友社  
全音楽譜出版社  
G, ヘンレ版

ペーターズ版  
パダレフスキー版  
デュランダ版

#### 英文要旨訳

本研究の目的はペダル技法の理論的、実践的解釈を行なわんとするものである。

ピアノ奏法におけるペダル技法は音楽性、特にレガート、フレーズ、リズムを表現する上での最も繊細な技法の一つである。ペダル技法は言わば情緒的表現法の一つであり、音符上明記されていることが少ない。従って多くの場合ペダル技法の活用に関して多く語られていず、ペダルの活用は演奏者の感情とその曲の解釈の自由に任されている。

本報では、筆者のピアノ演奏者として、又ピアノ授業における経験とを通して右ペダル（レガート・ペダル、アクセント・ペダル、トレモロ・ペダル、 $\frac{1}{2}$ ペダル）、左ペダル（ソフト・ペダル）そして中央ペダル（プロロングメント・ペダル）の技法並びに実際上の問題点、特に経過音、音階、休止符、スタッカート、低続音、アルペジオ、反復和音に関して基本的且実践的な例題を用い解釈を行なっている。